

アイラ島再び（その4） 佐伯 順弘（岐阜県）

DAY6 (13AUG2016) アイラ島滞在。

アイラ島に到着4日目。土曜日。



1658 終日、ウイスキー蒸留所を巡り、バスで宿泊地であるBowmoreの街に戻る。2.75GBP。

バス停から歩いて約1分。Bowmore Hotelに到着。もうアイラ島も4日目なので、本当に「ただいまっ！」という感じである。窓から見える空は穏やかな曇り空、夏なのに暑くない。外から帰ったら、うがい手洗い洗顔。旅ノート書く。

1922 ホテルのレストランへいく。バーが併設されているレストランで、ついに牡蠣を試す。通常旅先では牡蠣を食べたりしない。食中毒が怖いからである。食中毒になりでもしたら、行動が完全に制限されることになり、移動日であった場合、極めて危険な状態になる。その昔、マテガイで当たったことがある。夕食に食べたのだが翌日の午前中に発症。悪寒に襲われ、立っていられなくなった。一緒に食べた仲間は生徒が大勢いる廊下で倒れて吐いた。それはもう悲惨である。下痢便を漏らしてしまうよりはましかとも思うがどちらも勘弁してほしいものである。しかし、そこまで警戒しているにも関わらず敢えて牡蠣を食べるのは、それが使命であるからである。これもその昔、椎名誠の文章にボウモアでは牡蠣にスコッチウイスキー（もちろんボウモア）を少しかけて食べるのだと書いてあった。飲み仲間がそういっているのだから（飲み仲間とは大げさである。一度、一緒に飲んだことがあるだけである。その時、彼は生ビールの後にラフロイグを飲んでいて。）自分も試さなければならぬのだ。（そうか？）いや、試さなければならぬのだと思う。当たったら当たって、話のネタになるではないか。なにより、ウイスキーと生牡蠣の組み合わせという未知なる旅が目の前に扉を開いているのに、その一歩を踏み出さないなど、旅人とは言えまい。敢えて危険を冒し探検をする冒険探検部の端くれとして、ここでこの小さな冒険を回避するわけにはいかない。例え蛮勇と言われようとも、勇気をもって牡蠣に立ち向かうのだ。



控えめに3個。そして、そこに添えられていたのは、ボウモア 12 年である。それを即座に認識できる自分は流石だと一人悦に入る。ついにやりました生牡蠣にボウモア！牡蠣の燻製がおいしいように、スモーキーなウイスキーは牡蠣に絶妙に合う。もっと食べたい気もしたが、そこは自制しなければならぬ。旅先の暴飲暴食は身の破滅である。



他にショートパスタをいただいて、終日酔って長距離を歩き、疲れてもいたのでおとなしく部屋に戻り、寝る。

DAY7 (14AUG2016) アイラ島滞在。

アイラ島に到着5日目。日曜日。今日の蒸留所はボウモアのみ。午後から行く予定。午前中は予定をいれていない。これは当初からの綿密な計画の一環である。万一生牡蠣に当たった時のことを考えてできるだけ予定を入れないようにしていた。そういった緻密かつ大胆な計画が単独行には必要だ。大学生のころ、いや、もっと昔、小学3年生から自分は単独者であったのだ。その辺りの計画性は十分備わっていた。もう一人旅という冒険にハマっていた。どんな小さな旅でも自分にとって未開の地であればそれは冒険だ。さらに考えてみるに、そういった冒険を好む自分を育ててきたのは読書かも知れない。アムンゼンとスコット、スヴェン・ヘディン、ジュール・ベルヌ、加藤文太郎、ラインホルト・メスナー、沢木耕太郎など、多くの探検家、登山家、作家のおかげである。まだ、挙げればキリがない。そして、冒険探検部との出会いがその後の旅人人生を決定づけたのだ。

そんなことを考えながら、穏やかな曇り空の朝は、昨夜

の心配をよそに快便である。十分アルコール消毒をしていたのが効いたのかもしれない。昨日の疲れも残っていない。賭けに勝ったのだろう。運命はここで立ち止まるなど言っている。ありがたいことだ。

0800 朝食へ。基本的にこの朝食を一日のメインと位置付けているからいいようなものの、3食このペースで食べていては一回りも二回りも胴回りが成長してしまう。部屋に戻り、旅日記を付けたり、読書をしたりして体調を確認する。

1000 街を徘徊する。日曜日であるためか、いつものんびりしている街が更にのんびりしているように感じる。ホテルから5分ほどで波打ち際まで来た。海辺にはブヨの仲間だろうか、極小の吸血昆虫がいる。海水の環境で昆虫が生息できるのだろうか。海でボウフラ形態の幼虫がいれば、あっという間に小魚たちに食べられてしまうと思うのだが。そうでなくても、遊泳力がそれほど高くないはずなので、打ち上げられたり沖合まで流されたりと生息にはかなり厳しいはずだ。近くの淡水で発生して湿度の高い海沿いに集結していると考えた方が妥当か、などどうでもいい考察をしつつ海辺の生物を探す。



海なし県で育ったためか、海辺の生物には幼少のころからかなり高い関心があった。図鑑でみた生物たちがあふれかえっている海にいくとうれしくて仕方なかった。ボウモアの海にはそれほど生物はいないのだろうか。しかし、牡蠣は養殖しているようだし、カニやロブスターもかなり豊富らしい。日本のやや汚れた海にいる生物とは種類が違うだけなのかもしれない。潮の香りも日本の海ほど強くない。特に太平洋側の磯、潮溜まりのあるところではかなり潮の香りが強い。以前聞いたところによると海水プランクトンの死かいの匂いらしい。本当か嘘かは確認していない。確認するほどの興味もない。



海辺に立つのは午後から行くボウモア蒸留所。波打ち際とか、石垣のところにはカニなどがいると楽しいのだが、

特に生物は見当たらない。川の流れ込みがあり、ピートの大地を通ってくるためだろう、茶色に着色されている。岸に近い部分は海も茶色になっている。



oo-op で牛乳と水を買ってホテルへ一旦戻る。朝は曇っていて涼しいが昼になって日が射すと暑い。水分を積極的にとらないと健康を害する恐れがある。で、この時買った牛乳だがとてもおいしい。小中学校で無理やり牛乳を飲まされ、職についてからも職務だと認識して無理やり牛乳を飲まされてきたためか、若干の牛乳アレルギーだが、牛乳自体は嫌いではない。ただ、まずい牛乳が嫌いなだけだ。このoo-opの牛乳は関市の関牛乳、郡上市のミルパコ、飛騨市の牧成舎牛乳（いずれも岐阜県）に匹敵する旨さである。ううむ。スコットランドの牛乳も侮れない。ロンドンの某SBのラテは悉く激マズだったが、使われていた牛乳に問題があったのだろう。とりあえず、アイラ島では某SBを見かけたことはない。

部屋で牛乳を飲みながら読書をし、ボウモア蒸留所が開くのを待つ。日曜日は1200 オープンなので、計画に完璧にはまっているのである。

歩いて5分もかからないのに早めに出ると。



ボウモアホテルの玄関わきのテーブルではアイラ猫が寝ていた。カメラを向けるとあくびをする完璧なモデルぶりである。やるなお前。



早めについたが、ビジターセンターの位置口前にはベン

チがあり、そこで読書しつつ待つ。

1200 時間通りに扉が開けられる。入ってすぐのところにレセプションとショップがあり、まずはツアーを申し込む。7GBP, 2 杯付き。

ツアーが始まるまでに時間があるので、ショップで様々なボトルをチェックする。

Bowmore (レート計算は 202105 時点)

23 Year Old Port Cask Matured

379.75GBP (¥58534.66)

New Release Tempest Batch 6

49.99GBP (¥7705.46)

Devils Cask III Final Release Sherry Casks

195.00GBP (¥30057.30)

ボトルを買うかどうか悩む。買うべきか、買わざるべきか。買えることは買える。が、しかし、それを持ちかえるのが難しい。軽くはない。機内に液体は持ち込みにくい。荷物を預けるのは動きが悪くなるうえに、破損が心配。荷物がかかり乱暴に投げられているのは知っている。

結局、あきらめた。乗継や都市へのアクセス時の動きが悪くなるのは自分の旅ではない。

1230 ツアー開始。テイastingは海が見えるテイastingエリアで。気分がいい。蒸留所のテイastingエリアはどこも魅力的だ。

Ardbeg は秘密基地のような隠し部屋、Lagavulin は暖炉の部屋、Laphroaig は天井の低い薄暗いバー、そして Bowmore は海が見えるテーブル。どこも気分がいい。



このテーブルの反対側にはバーがあり、様々なテイastingセットが置いてある。また、ここには戻って来るからこのバーで飲むのは次にしよう。

1400 昼食を摂っていなかったので、この街でもいいレストランという位置づけのハーバー・インに入る。ここは当然宿泊できるのだが、定宿はボウモアホテルに決めているし、若干宿泊費が高いのでここに泊まることはないだろう。

昼食なのだか、ビールとスモークサーモン。時間も時間だし、夕食に影響するくらい大食いするのも、手の込んだものをオーダーするのもよろしくないかなという感じもあり軽めにしておいた。時間を外したせいで、他の客はいなくてのんびりと過ごせたが、スタッフは休憩したかっただろうなあ。



椅子はボウモアタータンを使って作られていた。ここで解説せねばなるまい。タータンとは多色の糸で綾織りにした格子柄の織物のことで、スコットランドにおいては、日本の家紋のようなものである。ボウモアタータンもラフロイグタータンもエジンバラタータンもあるのだ。今はファッションとして広まっているが、本来はその家系特有のものだったらしい。以前、エジンバラ城の中にあるショップで数多くのタータンチェックの製品が置いてあり、かなり勉強になった。今日はボウモアに行ったばかりなので、そこでボウモアタータンはどのようなものであるか理解した。それをさっそくテストされたようだが、「ちゃんと、わかってんのか？」という神の意志を感じないわけにはいかなかった。

1400 部屋に戻り、夕方まで転寝する。ここが一人旅のいいところである。

1920 今日は日曜日なので、BBQ メニューのみ。

これはサンデーローストと言って、日曜日は父さんがローストビーフを作って家族に食べさせるという習慣(?)からくるものらしい。おいしそうだったので、様々な肉をミックスしてサーブしてもらった。



牛も羊も鶏もどれも旨い。かけてあるソースも絶品である。毎回この話題になるとはっきりと主張させてもらうのだが、イギリスの飯がまずいという輩はいったい何を食べてそれを言っているのだろうか。ドッグフードでも食べてるんじゃないのか。肉とビールで豊かな夕食を終える。

シメはウィスキー Bowmore Black Rock にした。いつもの Bowmore 12y ではなく、もっといろいろなものを学ぶべきなのだと思うからだ。いつものを安心して飲むのもいいが、一つのところに安住してはいけい。ウィスキーはそういった生き方についても考えさせる。2230 明日は夕方フライトだが、移動日である。早めに寝る。Caol Ila にも行くし。(続く)